

Strix 7: 239-248 (1988)

## 十勝地方におけるタンチョウの繁殖地とその個体群の越冬地

正富宏之<sup>1</sup>

### はじめに

北海道におけるタンチョウ *Grus japonensis* の個体数は近年しだいに増加しており、繁殖地も十勝、釧路、根室および網走（現在は途絶えている）の3支庁管内にまたがっている。しかし、一時絶滅を伝えられ、1920年代後半に生息が再び認められたとき、その分布範囲は釧路湿原を中心とした地域と思われていた。したがって、1935年に釧路湿原の一部が「丹頂鶴蕃殖地」として天然記念物に指定されたさいはもちろん、特別天然記念物に格上げされた1952年のときの名称ですら「釧路のタンチョウ及びその繁殖地」であった。

やがて、1950年代前半から根室地方での繁殖が報告されるようになり、さらに十勝地方では1940年代以後いくつかの記録が得られ、1970年代からは繁殖も確実に記録されるようになった。その後空からの広範囲な調査が行なわれるようになり、繁殖期の分布域や繁殖状況などの資料もしだいに多くなってきた（たとえば北海道 1975, 1981, 1986, 正富ほか 1982, 1983, 1986, Masatomi *et al.* 1985）。

このうち十勝地方に関しては飯嶋と山田（1983）が十勝南部の生息状況を、日本野鳥の会十勝支部（1987）が十勝全域の1985年までの事例を整理して報告している。ところが、そのうち当地方のタンチョウ個体群の繁殖状況や越冬地について、従来と異なった現象が認められている。この状況が今後も継続するか否か興味ある点で、十勝地方におけるタンチョウ個体群の保護を考える上でも見過ごせないで、ここに簡単に報告しておきたい。

### 調査方法

この報告でもちいた資料は、1986年および1988年のいずれも5月に行なった軽飛行機による空中からの観察と、1986年から1988年までの3年間に行なった越冬地での個体数調査に基づいている。このうち1988年の調査以外はその結果をすでに報告済みであり（正富ほか 1986, 1986a, Momose & Masatomi 1988）、ここでは調査方法の記述を繰り返さない。詳細はそれらの文献を参照されたい。1988年の越冬地及び繁殖地における調査結果も近いうちに報告するが、調査方法はいずれもそれ以前の方法と大差ない。

繁殖期における調査範囲は、利別川との合流点から下流の十勝川（下頃辺川、浦幌川なども含む）流域と、その河口から大樹町の歴舟川に至るまでの海岸ならびに点在する長節（ちょうぶし）沼、湧洞沼、キモントウ沼、ホロカヤントウ沼、生花苗（おいかまない）沼などの湖沼群周辺である。越冬期における調査は、釧路管内阿寒町および鶴居村の主要

---

1988年10月30日受理

1. 〒 079-01 北海道美唄市光珠内 専修大学北海道短大

な3か所の給餌場におけるものが主であるが、それ以外の小給餌場での調査と情報収集も合わせて随時行なった。

なお繁殖期の当該地域の調査は1986年5月31日と1988年5月9日で、冬期の個体数調査は1986年2月4～6日、1987年2月3～10日、および1988年2月8～10日である。

## 結 果

### 1. 繁殖期

1986年および1988年の5月におけるタンチョウの分布を示すと図1となり、その地点の名称は表1に示した。なお、営巣地点の表示の統一性を考慮して、表には自然環境保全基礎調査用メッシュ地形図に付けられたメッシュコードを併記してある。ただ、そのメッシュはほぼ1km平方と大きいため、さらに4分割して約500m平方のメッシュとし、北部を10(第4象限)と11, 南部を00(第3象限)と01としてコード末尾に加えてある。

表1. 1986年と1988年に空中調査でみつけた巣と個体の位置

Table 1. Location of nests and individuals found from the air in 1986 and 1988.

	1986		1988	
	Code no.	Nest & indiv.	Code no.	Nest & indiv.
Toberi	6443-63-16-10	N-A	6443-63-16-10	N-A
			6443-63-26-00	A
Oikamanai	6443-63-68-11	AA	6443-63-77-11	N-A
			6443-63-77-01	A
			6443-63-79-10	AA
			6443-63-79-01	A
			6343-64-70-00	N-A
Kimonto	6443-73-18-11	N-AA	6443-73-18-11	F-AAC
			6443-73-38-01	AA
Yudo	6343-74-42-01	F-AAC	6343-74-11-01	A
			6343-74-30-11	A
			6343-74-40-01	N-A
Chobushi			6443-04-08-00	N-A
Tonkeshi			6443-05-10-11	N-A
			6443-05-11-00	A
			6443-05-21-10	N-AA
Tabikorai	6443-04-97-01	SSS		
Shimohorooka			6443-14-16-10	AA
Seoi			6443-14-42-01	AA
Toidokki	6443-05-54-11	AA		

A: Adult and or subadult. C: Chick. F: Family. N: Nest. S: One-year-old subadult.

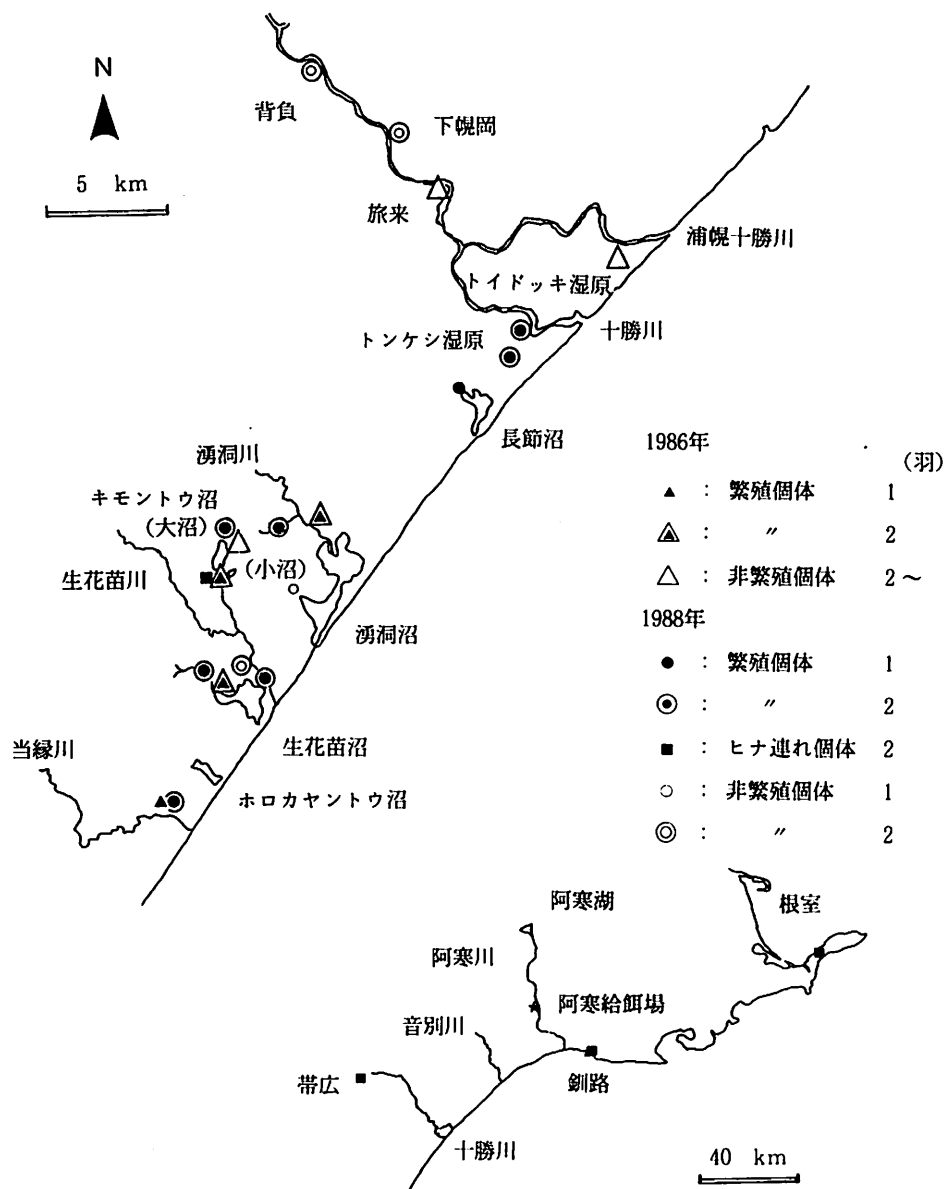


図1. 十勝地方における繁殖期のタンチョウの分布.

Fig.1. Distribution of the Tancho in the breeding seasons in Tokachi.

1986年に空からみつけたつがい数は6であるが、抱卵または抱雛巣数およびヒナを連れているのを確認したつがい数は、それぞれわずか1であった。しかし、その後の地上調査などから6つがい中少なくとも4つがい繁殖が行なわれたことが確かめられた（正富ほか1986）。この年に空からの巣の発見数がきわめて少ないのは、調査時期が遅くすでにタンチョウの就巣期の峠を過ぎていたため、繁殖状況が特に悪かったためではない。さらに、非繁殖鳥として3羽の亜成鳥（すべて1才鳥）を認めたから、空からは総計15羽を記録したことになる。

1988年の発見巣数は8で、いずれも1羽が巣に就いていた。ほかにヒナを連れた1つがいを観察したから、営巣つがいの合計は9となる。それ以外に2羽ずつで行動する3組を認めたから、ヒナを除いた合計発見羽数は24である。しかし、長節沼の営巣地では巢上に1羽が座っていたものの、そのつがい相手は周辺ではみあたらなかった。湧洞沼南部に単独個体を認めたが、それが上記の相手とはみなしがたいから、あるいは全体で25羽の個体がいたのかもしれない。なお、巢上にいるつがいの相手が、たとえば狭い溝の中とか林の中、あるいはいくぶん離れた遮蔽物の陰などで索餌していたりすると、空から発見できないことも往々にして起きると考えられる。

1986年と1988年の営巣地点をみると、まず当縁（とうべり）湿原では、わずかに残存する沼の岸近くのはぼ同じところに営巣していた。1985年も同様のところ（地形的に場所を特定し易い）に巣が作られており（北海道 1986）、この繁殖地の造巣場所は数年にわたってきわめて限定されているといえる。

生花苗沼周辺では、1986年に1つがいが営巣した可能性はあるが、巣の場所は特定できていない。1988年は沼の北を流れる生花苗川と沼の西側から流れ込む生花苗沼川の流域に、それぞれ1つがいが営巣した。両巢の間隔はおよそ2.5kmで、この沼の周辺で2つがいの同時繁殖を確認したのは今回が初めてである。

1986年の営巣点は、空中調査時にすでに離巢したものが多いため、1988年の巣位置と対比するのはむづかしい。しかし、キモントウ大沼北とキモントウ小沼南の両地域において、1986年と1988年ではほぼ同じ所につがいや巣がみられている。それゆえ、他の年の営巣の状況（たとえば北海道 1986）も参考にすると、両年ではそれぞれ近接した位置に営巣したのかもしれない。

湧洞沼では、1986年に沼北部の湧洞川沿いの比較的開けた湿原でヒナ連れのつがいをみつけたが、その近くで営巣したものか、それとも西（キモントウ沼方向）へ伸びた支流域の小湿地で営巣してそこまで移動してきたものか判定はできない。それというのも、湧洞川流域ではこれら2地点でそれぞれ巣を認めたことがあるからである（正富ほか 1982）。1988年には支流の小湿原で営巣がみられ、ここも比較的せまい範囲ですでに少なくとも3回の造巣が記録されたことになる。

長節沼では、1986年9月26日に幼鳥連れの家族が観察されたが（飯島私信）、5月の空からの調査では営巣を発見できなかった。しかし、1988年は沼奥の岸に近いところで1羽が巣に就いており、1984年に初めて営巣を確認してிரை空中調査における2度目（1987年は調査資料なし）の記録となる。

長節沼の北には低い丘陵が海岸まで張り出して十勝川との境をなしているが、この丘陵と十勝川右岸にはさまれたトンケン（大津）湿原では1986年に営巣記録はない。しかし、ここは繁殖地として従前から知られており、1988年にはそれまでもよく造巣の行なわれた小沼近くで就巢個体を認めた。さらに十勝川寄りの湿原には、自動車道路をあいだにはさむとはいえ、前記の巣からわずか1kmのところの営巣するつがいをみつけた。この湿原で同時に2つがいの営巣がみられたのは初めてである。

十勝川河口の左岸に広がるトイドッキ湿原では、1986年に浦幌十勝川河口付近で1つがいを認めたが、1988年には発見されなかった。

以上が繁殖ないしはその可能性の強い個体（トイドッキ湿原の例）についてであるが、

表2. 冬季給餌場におけるタンチョウ個体数

Table 2. Number of the Tancho counted at the feeding stations in February.

	Onbetsu	Akan	Naka- & Shimo-setsuri	Others
1983-4 *	0	96(11)	205(15)	12(4)
1984-5	5(1) * *	117(16)	218(27)	4
1985-6	16(3)	119(14)	240(25)	8(2)
1986-7	25(4)	113(11)	240(28)	17(3)
1987-8	18(2)	109(10)	243(22)	23(5)

( ): Number of juveniles.

\* : Censused by Koyanagi *et al.* in January.

\* \* : The feeder observed eight cranes.

1986年には旅来(たびこらい)付近の十勝川右岸の泥地で亜成鳥(1才鳥)3羽が索餌しているのをみた。また、1988年にはそれよりやや上流の下幌岡南18号付近の十勝川左岸にある小沼で2羽、およびその約4km上流の右岸で同じく2羽をそれぞれ認めた。さらに、生花苗沼の湿原にも繁殖活動不明の2羽と湧洞沼南部の沼奥に1羽がいたから、それも含めて2羽ずつ3組と1羽の計7羽をいちおう非繁殖鳥とした。しかし、前年生まれの亜成鳥の3羽を除くこれらの個体は、年齢も不明であり、繁殖活動を全く行なわなかった個体であると断定するのはむづかしい。

## 2. 越冬期

十勝地方では遅くは1月の中旬、早くは2月下旬にタンチョウが観察されることもまれにあるが(野鳥の会十勝支部1987)、今のところ継続して越冬する場所は知られていない。おそらく、厳寒期にはやや北上して釧路地方の給餌場を中心とする越冬地へ移動するものと思われる。1983年の冬までは、それらは最も近い阿寒町23線にある給餌場(阿寒給餌場)まででも約65km、やや遠い鶴居村の下雪裡と中雪裡にある給餌場の場合には80km前後の距離を飛行したのであろう。

ところが、1984~85年の冬からは阿寒給餌場の南西へ約30km離れた音別川流域、すなわち、十勝川河口部と阿寒給餌場のほぼ中間に当たるところで越冬する個体がみられるようになった。1985~86年には、その個体数は幼鳥(1才未満)3羽と亜成鳥を少なくとも1羽含む16羽で、1986年の十勝地方における6つがい(おそらく成鳥)と前年生まれの亜成鳥3羽、計15羽という数と年齢構成がほぼ一致している。したがって、両者が同一個体群である可能性は極めて高いと推測された(正富ほか1986)。1986~87年の音別川における越冬数は25羽で、そのうち幼鳥は4羽であった。しかし、1987年には空中調査が実施できなかったため、十勝地方の繁殖期のタンチョウ総個体数はつかめていない。1987~88年の越冬数は18羽(内幼鳥4羽)と見積られたが、同じく1988年の繁殖期の個体数は、前述のように亜成鳥3羽を含む24羽である。

では、それらが音別に現れる以前にどこかの給餌場で越冬していたのであろうか。それを推定するため、道東における冬期の個体数を、給餌場からの移動が最も少ないと思われる厳寒期にカウントした結果で示すと表2になる。

タンチョウは近年増加傾向を示しており、1986年には個体数の前年比が全体で11.3%

増なのに、阿寒給餌場ではわずか1.7%の伸びにすぎない。これに対して鶴居村の二つの給餌場（中雪裡と下雪裡の給餌場間では、個体の相互移動があるためひとまとめにしておく）では、前年比10.1%の増加である。もし阿寒給餌場でも同様の増加をすると仮定すれば、増加分は約10羽となるから、これが音別へ回ったとみなすことも可能である。

## 考 察

営巣地の分布をみると、1986年と1988年の両年とも新たな繁殖地が見つかったわけではない。しかし、これまで1つがいしか繁殖の記録のない生花苗沼の湿地で2つがい営巣したこと、長節沼とトンケシ湿原で同時に、かつ後方で2つがい近接して営巣したのは新しい現象である。

まず、生花苗沼では1978年に初めて繁殖が確認され、さらに繁殖に加わらない個体もときどきみられるという（野鳥の会十勝支部 1987）。1988年にも巣を持たない2羽（おそらくつがい）を認めたから、この年の調査時には3つがい沼の周囲に生息していたことになる。この地域は、周辺での干拓や河川改修が行なわれて環境は悪化しているが、まだ多少の適地が残っており、タンチョウの繁殖・生息地としてきわめて重要な場である。

野鳥の会十勝支部（1987）は長節沼・トンケシ（大津）湿原・トイドッキ湿原を1つがいの繁殖エリアとみなした。もちろん、あるつがい年により営巣場所を変えていた可能性は否定できないが、1988年にはここで同時に3つがい営巣した。ただ、上記支部は十勝地方で生息数が増えればこの地区に居つくかもしれないと述べており、1988年にはそれが的中したといえよう。しかし、これらの地区はいずれも湿原面積、農業活動、道路造成、干拓化、安全性などいろいろな点で問題を抱えた場所である。したがって、継続して営巣が行なわれるか否か経過を見守る必要があると同時に、それらの問題点を少しでも軽減するような保全対策をとらなくてはならない。

十勝地方のこれまでの営巣地点の最大数をとると1988年の結果も含めて12カ所となるが、1繁殖期に記録された最多繁殖つがい数は1980年の7つがいである（野鳥の会十勝支部 1987）。年により調査に精疎があるのを承知のうえで、1973年から1985年まで（1975年は資料なし）の平均繁殖つがい数を算出すると4.4つがい、1980年以降のそれでも4.8つがいとなる（野鳥の会十勝支部 1987から計算）。これにたいし、1988年に繁殖活動を確認したのは9つがいとほぼ倍の値を示している。そのうえ、道東全体からみた十勝地方の繁殖確認つがい数の平均割合も、1973年から1985年までの間で比較的広範囲に営巣記録の得られた6年分（1973, 1974, 1979, 1983, 1984, および1985）の資料から計算すると6.0±0.5%（資料の読み方により若干差がでる）となり、最大割合でも1979年の8.2%である（北海道 1986）。しかし、1988年にはそれが10%にまで達している。

では、なぜこのように繁殖つがいが増えたのであろうか。一つの説明は釧路・根室などの主要な繁殖地の収容力とタンチョウ個体群成長との関連である。つまり個体数が増加しているのに現存繁殖地が限定ないし縮小しつつあるため、込み合い現象が起きている可能性である。しかし、この問題は道東の繁殖地全体でみる必要があるため稿を改めることとし、ここでは可能性の一つであることを指摘するにとどめる。

もう一つの考えられる要因は新たな越冬地の形成であろう。確かに、十勝地方に現れるタンチョウと音別川流域（おもに二俣地区）で越冬する個体群とが同一のものであるとい

う直接的証拠はない。しかし、十勝地方における生息域と各越冬地との位置関係、十勝・音別両地域の個体数とその年齢構成などからみて、両者が同じ個体からなるという仮定もそれほど無理はないといえるだろう。それでも、十勝地方に現れる個体がすべて音別川流域で越冬するとは限らず、それは1988年の音別の個体数が18で十勝のそれが24であることから明らかである。さらに、繁殖期に十勝川や前記湖沼群周辺でみられる個体数（生育した幼鳥を含む）より、秋期にみられる個体数が多くなることもあるという（野鳥の会十勝支部 1987）。このことは、越冬と繁殖両地域の個体数が必ずしも一致しない場合が生ずることを示唆している。

十勝と音別の個体が同じであるとしても、それでは越冬地と繁殖地が近くなるのが繁殖つがいの増加と結び付いているといえるであろうか。残念ながらそれを明らかにするような資料はほとんどない。ある範囲の地域を限ってみると、たしかに年により発見される繁殖つがいの数が異なるようにみえることもある。たとえば、野付半島周辺では1973年から1988年の間に行なわれた空中調査で発見された繁殖つがいの数は2から7となっている（北海道 1986, 正富ほか 1986）。しかし、これには自然の営巣つがいの数変動のほかにもその年の調査条件が大きく働くので、傍証としての価値は低い。したがって、もしも十勝地方の繁殖つがいの数が従来よりもやや高い水準（繁殖地の条件からみて飛躍的増加は望めない）で今後も維持されるとすれば、越冬地が近くなったことがそれに関与していると推測できる一つの事例になろう。

ここで、音別川流域に新たに越冬地が形成された理由について簡単に触れておきたい。この流域は十勝の個体群の回帰移動経路に当たると思われ、従前から移動期にまれに出現が認められ、タンチョウ飛来と全く無縁だったわけではない。釧路地方における各冬期給餌場を中心とした越冬地の収容力がおよそ決まっているならば、たとえ年によってそれが多少変動するとしても、全体の個体数増加にともない、条件の整ったところに新たな越冬地が形成されても不思議ではない。とくに阿寒、中雪裡および下雪裡のいわゆる3大給餌場を中心とする個体群サイズが、最近ほぼ同じなのに対して、それ以外のところの個体数が増加しつつある現象（表2参照）が、音別川流域の越冬群形成と無関係ではないだろう。ただこの場合も、阿寒給餌場で個体数が1981年に160羽台を示した例もあるから、キャパシティは厳格に固定した個体数枠として存在するのではないことはもちろんである。こうした新越冬地個体群の形成現象は、各給餌場における個体数維持の上限と関連して今後注目すべきことの一つである。

いずれにしても、十勝地方の個体群と音別川流域の越冬群との関連を確実に知るために、バンディングなどによる個体標識を基にした直接的証明が待たれる。また、おそらく同一者のこの個体群が、どのような個体数変動や繁殖活動をみせるかを捉えるには、繁殖期における空と陸からの観察と越冬地での確実な個体数把握の二つが同時にぜひ必要である。こうして推移を注意深く観察することにより、繁殖地はもちろんのこと、越冬地全体の維持についても重要な示唆が得られるであろう。特に新たな越冬地の形成は、現在集中して越冬する個体群を分散させる意味合いを持ち、安全性の面からも歓迎すべきことである。したがって、新たな音別越冬地の保全について十分な配慮が必要である。

## 謝 辞

1988年の越冬期および繁殖期には次の方々と協力して調査を行なった：安部誠典，石倉真理子，川村健一，喜代門勇，松尾武芳，百瀬邦和，大橋信一，佐久間光吉，桜井幸次，札木ゆりあ，新庄久志，杉沢拓男，竹下信雄，富岡辰行，柳浦茂行，柳谷源悦。これらの諸氏に心からお礼申し上げる。また，大樹町の飯嶋良朗および音別町の柳谷源悦両氏には草稿をお読みいただき貴重なご教示を賜ったことに，道自然保護課の大森信善および阿寒町の佐藤照雄両氏には資料と情報をお寄せいただいたことに深く感謝申し上げます。なお，調査費の一部はWWF-Jにご援助いただいた。

## 要 約

1988年の越冬期および繁殖期の調査を踏まえて，北海道十勝地方における1985年以降のタンチョウの繁殖分布とその個体群の越冬地の新たな状況について考察した。

1986年の繁殖つがいは従来と同水準の4つがいて，発見個体数も15羽であったが，1988年の就巢およびヒナ連れつがいはこれまでの最高の9つがいて，個体数は24羽を記録した。そのため，従来1つがいがしか営巣しなかった生花苗沼に2つがいと，長節沼から十勝川河口の湿原にかけて3つがいが同時に営巣するなどの新たな現象が認められた。

さらに1984～85年冬期から，釧路の越冬地と十勝の繁殖地の中間に当たる音別川流域で新たに越冬個体群が形成され，1986～87年には25羽を数えた。直接的証拠はないが，十勝地方に飛来する個体群のおそらく一部と推測した。

十勝地方における繁殖つがいの増加と新たな越冬地の設定との関連，および新たな越冬群の形成の原因等について若干の考察を行なった。

今後も繁殖地と越冬地それぞれの状況の推移を把握することと，両地域の保全の必要性を指摘した。

## 引用文献

- 北海道. 1986. タンチョウ特別調査報告書. 北海道, 札幌.
- 北海道教育庁. 1975. 特別天然記念物タンチョウ特別調査報告書. 北海道教育委員会, 札幌.
- 北海道教育庁. 1981. 特別天然記念物タンチョウ特別調査報告書. 北海道教育委員会, 札幌.
- 飯嶋良朗・山田政一. 1983. 北海道十勝南部におけるタンチョウの生息状況. 鳥 32: 129-138.
- 正富宏之・安部誠典・百瀬邦和・松尾武芳・長山清美. 1982. 1982年繁殖期におけるタンチョウの分布. 専大北海道紀要 15: 163-173.
- 正富宏之・安部誠典・百瀬邦和・杉本剛・長山清美. 1983. 1983年繁殖期におけるタンチョウの分布. 同上 16: 200-212.
- Masatomi, H. Momose, K. and Hanawa, S. 1985. Aerial surveys on Tancho (*Grus japonensis*) breeding in eastern Hokkaido in 1984. In "International Spring Censuses on *Grus japonensis* (Red-crowned Crane) in 1984" ed. by H. Masatomi: 37-66.
- 正富宏之・松尾武芳・小山政弘・松村一朗. 1986. 1986年の繁殖期におけるタンチョウの分布. 鳥 35: 47-59.
- 正富宏之・百瀬邦和・杉沢拓男・菊池浩・桜井幸次. 1986a. 冬期給餌場を利用するタンチョウ個体数. 専大北海道紀要 19: 45-54.
- Momose, K. and Masatomi, H. 1988. Number of the Tancho wintering in Hokkaido,



Japan, in 1986-87. In "International Censuses on *Grus japonensis*, the Tancho or the Red-crowned Crane, in the Wintering Grounds. 1986-87" ed. by H. Masatomi : 37-45.  
日本野鳥の会十勝支部. 1987. 北海道十勝地方のタンチョウの生息状況. Strix 6 : 1-13.

Breeding status of the Tancho in the Tokachi district and its  
wintering grounds since 1985.

Hiroyuki Masatomi<sup>1</sup>

The distribution of the Tancho *Grus japonensis* in the Tokachi district in the breeding season and its wintering at probable new sites since 1985 are described briefly. Only four pairs succeeded in breeding in Tokachi in 1986, but 24 individuals including nine breeding pairs, the largest number since 1971, were found from the air in May of 1988. Two pairs first bred near Lake Oikamanai, and three pairs nested near Lake Chobushi and in the basin of the Tokachi river mouth, though only one pair used to breed in each area. On the other hand, cranes began roosting along the Onbetsu river which flows in the middle of the breeding grounds in Tokachi and in the traditional wintering grounds in Kushiro in 1984-85 winter. During 1986-87 winter 25 cranes were seen in Onbetsu. Most of the cranes observed in Tokachi probably wintered in Onbetsu, though no positive proof that they were the same has been obtained. Relationship between an increase of breeding pairs in Tokachi and wintering individuals in Onbetsu, and factors relating to new wintering flock formation were discussed briefly. In any event both the areas should be protected to maintain the Tokachi population.

1. Hokkaido College of Senshu University, Bibai-shi, Hokkaido 079-01